

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520262

研究課題名（和文） ナイル諸語の通時的研究-ナイル諸語比較語彙集の作成-

研究課題名（英文） Diachronic Studies of Nilotic Languages-Making Comparative Word List of Nilotic Languages

研究代表者

稗田乃

東京外国語大学・アジアアフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号 90181057

研究成果の概要：東アフリカでの現地調査とドイツにおける埋もれている資料の開拓により、ナイル諸語の未だに十分でない言語資料を収集することにより、既に収集していた資料とをあわせて、ナイル諸語の通時的研究をおこなった。具体的な成果として、通時的研究の基礎資料となるナイル諸語比較語彙集を作成した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	800,000円	0円	800,000円
2006年度	800,000円	0円	800,000円
2007年度	800,000円	240,000円	1,040,000円
2008年度	700,000円	210,000円	910,000円
年度			
総計	3,100,000円	450,000円	3,550,000円

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：歴史言語学

キーワード：歴史言語学、比較言語学、ナイル諸語、クマム語

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初に「歴史言語学の領域のなかで、一番遅れているのがナイル・サハラ言語ファミリーの通時的研究である」と書いている書物も存在した。ナイル諸語は、グループ内で言語数に関して最大である。したがって、ナイル諸語の通時的研究は、ナイル・サハラ言語ファミリーの通時的研究において欠かすことのできないものと判断できた。実際、部分的な通時的研究は存在したが、ナイル祖語を再構成したまとまった研究は、当時、存在しなかったし、本研究代表者による著作以外に現在でもまとまった研究成果は存在しない。また、通時的研究の基礎的資料となる比

較語彙集は、本研究により実現したもののおかげで、存在しなかった。また、通時的研究に使える十分に記述的資料をもたない言語も存在した。また、通時的研究に利用されずに見逃されてきた資料がドイツ国内に埋もれていた。

ナイル・サハラ言語ファミリーは、系統分類不可能なサハラ砂漠以南で話される言語をいれておくための「ゴミ箱」のような存在であった。研究者たちは、伝統的な通時言語学の手法が不可能と考えて大胆ではあるが不適切の手法を用いて、ナイル・サハラ言語ファミリーの分類を試みることもあった。しかし、通時的研究は、たんに言語を分類するこ

とを目的にしている。過去の言語の姿を明らかにし、さらに、現在の言語の姿に、どのように変化してきたのか、なぜ変化したのかを考察するのが通時言語学の目的である。この目的にそった、ナイル諸語の通時的研究は、研究開始当初には存在しなかった。

## 2. 研究の目的

「もっとも遅れている」と言われていたナイル・サハラ言語ファイラムの歴史言語学を少しでも前に進めるために、まず、グループ内で言語数において最大であるナイル諸語の通時的研究を前進させることを目的とした。そのために具体的には、通時的研究の基礎的資料となる、ナイル諸語比較語彙集を作成することを目的とした。

未だに十分に記述されず、通時的研究に必要な資料が存在しない言語を現地調査により記述することを目的とした。さらに通時的研究に使用可能にもかかわらず見逃されてきたドイツ国内に存在する資料を掘り起こすことを目的とした。

通時言語学の目的は、たんに言語を系統分類することではない。研究対象の言語が過去にどのような姿をしていたか、時間の流れの中でその言語がどのように変化したのか、なぜ変化したのかを、研究目的にしている。さらに、対象言語のみならず、言語一般が、どのように時間的に変化するのか、なぜ変化するのかを考察することを目的とする。本研究は、言語分類を目的とはしていない。むしろ、研究対象であるナイル諸語がどのように変化したのか、なぜ変化したのかを明らかにすることを目的とした。

音韻論を中心に通時的研究をおこなうが、個々の言語において規則的な変化にしたがわなかった理由を明らかにすることを目的にした。そのために、具体的には、広範な資料を比較語彙集の形式で整理することにより規則的な音韻変化と規則的でない変化について明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

研究方法としてまず第1にしなければならなかったことは、通時的研究を可能にする必要な資料を確保することである。それには、これまで収集してきた資料に加えて、現地でも十分に記述研究されてこなかった言語を調査研究し、通時的研究に可能な形式にすることであった。研究代表者が調査したクマム語は、名前だけが知られている言語であった。クマム語の現地調査は、音韻論、形態論、統語論の領域で行った。また、ドイツ国内に存在したが通時的研究に使用されなかった言語資料を掘り起こすことであった。主要なド

イツの研究機関である、ケルン大学、ベルリン・フンボルト大学、フランクフルト・ウルフガング・ゲーテ大学、ライプチヒ大学等を訪れてナイル諸語言語資料を収集した。それと同時に研究者と研究方法について議論した。

これらの資料を用いて、通時的研究の基礎となる比較語彙集を作成した。

資料を分析する方法は、伝統的な歴史言語学の手法である、内的再構成と比較方法を主に採用した。しかし、これまでの研究がなしえなかった理由であるナイル諸語の歴史の深さからくる、伝統的な内的再構成と比較方法では成功しないところは、あらたな工夫をおこなった。それは、音声学の生物学的基礎、認知言語学等の最近の言語学の成果を採用することにより、歴史言語学が学問として自立不可能な部分を補う方法を開発した。そのことにより、ナイル諸語の通時的研究を前進させることを可能にする手法を編み出した。

## 4. 研究成果

具体的な成果としては、本研究のサブタイトルにもある、ナイル諸語比較語彙集を作成したことである。これは、以下の発表論文等のリストにある、*Comparative Word List of Nilotic Languages* である。これにより、ナイル諸語の通時的研究の基礎資料が整備された。この比較語彙集は、たんに語彙を並べているのではなく、そこから内的再構成と比較方法という歴史言語学の伝統的な手法を用いて、ナイル祖語の形式を再構成したものである。しかも再構成した形式から現在の形式に変化する様子を再現している。この比較語彙集は、再構成のプロセスを書くことは省略している。ただし、英語で出版することにより、広く国際的に批判にさらすことを可能にしている。再構成のプロセスについては、日本語であるが、「ナイル語比較研究の諸問題—ナイル語西方言における名詞語形成法を中心に—」という単行本で明らかにすることに努めた。

現地調査により今まで名前しか知られていなかったクマム語の言語体系が明らかにした。声調体系やリズムについての研究成果を国際学会で発表を行ったり、また、出版を行った。2007年パリで開催された国際学会で研究発表を行うことにより、ナイル諸語通時的研究が前進することが期待できると知らしめることにより、国際研究者ネットワークの構築を可能にした。2007年パリで開催された国際学会は、ナイル・サハラ言語ファイラムに所属する言語の通時的、共時的研究をおこなう研究者が集まる、世界でただ1つの国際学会である。クマム語の言語構造は、他のナイル諸語とはかなり異なっており、クマム語

成立について言語学的な興味のあるテーマを提供する可能性があることを明らかにした。また、クマム語の形態統語論研究は、通言語学的にも興味あるテーマを提供する可能性がある。

また、ドイツでの資料発掘の過程において、多くの国際的研究者の協力を得ることができた。その成果により、科研によるあらたなプロジェクトを立ち上げることができた。クマム語調査に関しては、新しい研究プロジェクトのもとで調査研究を継続し、辞書、文法書の出版の準備をすすめている。

通時的研究の目的は、たんに対象言語の歴史的变化を研究するにとどまらない。言語一般の通時的变化を研究することを目的としている。ナイル諸語の通時的研究は、言語一般における通時的研究に貢献しなければならない。その視点からの成果として、ナイル諸語の通時的研究で得られた言語一般の通時的研究は、日本言語学会の2008年度夏期講習において「歴史言語学」の講習により、広く社会還元した。

言語一般における通時的研究への貢献として、2009年3月に開催された国際学会において研究発表を行った。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

1. Hieda, Osamu. 'Singulative in Nilotic' *Nilo-Ethiopian Studies*, 10, 2006, pp.1-14. 査読有
2. 稗田乃、「危機に瀕した言語における変容について」、『スワヒリ&アフリカ研究』、16巻、141-156頁、査読有
3. Hieda, Osamu. 'On a role of rhythm in Kumam phonetics', *Journal of Swahili and African Studies*, 19, pp. 85-113. 査読有
4. 稗田乃、「クマム語形態音韻論におけるリズムの役割」、『京都大学言語学研究』、27巻、49-80頁、査読有
5. 稗田乃、「歴史を持たない言語における歴史言語学」、『月刊言語』、38巻2号、18-25頁、査読無

[学会発表] (計 3 件)

1. Hieda, Osamu. 'On the role of rhythm in Kumam morphology', *10<sup>th</sup> Nilo-Saharan Linguistics Colloquium*, Paris, 2007/08/22-24.
2. Hieda, Osamu. 'Word order change in Western Nilotic', *Methodology of Morph-Syntactic Change*, National Museum of Ethnology, Osaka, 2009/03/05-06.

3. 稗田乃、「クマム語の声調体系」、日本ナイル-エチオピア学会、弘前大学、2008年4月26日

[図書] (計 8 件)

1. Hieda, Osamu. Graduate School of Letters, Nagoya University, 'Datooga Vocabulary' in (Shimada Y. (ed.)) *Ethnic Africa as Regional System by Tomikawa Morimichi*, 2005, pp. 211-247.
2. Hieda, Osamu. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 'Tonal expressions of aspect in Kumam' in (Kaji, S (ed.)) *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena*, 2006, pp. 105-121.
3. 稗田乃、アジアアフリカ言語文化研究所、「ナイル語比較研究の諸問題—ナイル語西方言における名詞の語形成法を中心に—」、2006年、総338頁
4. Hieda, Osamu. Harrassowitz, 'Kwegu-Muguji', in (Uhlig, S. (ed.)) *Encyclopaedia Aethiopica* 3, 2007, pp. 463-464.
5. 稗田乃、日本言語学会、「歴史言語学」、『日本言語学会夏期講座 2008 Seminar Handbook』、2008、49-80頁
6. Hieda, Osamu. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, *Comparative Word List of Nilotic languages, Internal Reconstruction, Comparative Method and Reconstruction*, 2009, 117pp.
7. 稗田乃、(稗田乃、峰岸真琴、川口裕司共編)、東京外国語大学『言語記述から言語分析の応用へ』2009、総194頁
8. 稗田乃、「クマム語の声調体系」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.3、2009、19-43頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

日本言語学会 2008年夏期講習において「歴史言語学」の講師をつとめた。これにより広く社会貢献に努めた。

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
稗田乃

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし